



Member's Open Space



## 狂歌で綴る遊里の一日 (十二時)<sup>とき</sup>

●美唄歯科医師会会員  
雨田 実

川柳で綴る遊里史という拙文を、広場に載せていただいたところ、ご年輩の先生方から、大まがきの店をもう少しわしくの外に、川柳の外のもので綴れないものかのご指摘をいただいたもので、拙文を省みず綴らせていただく。遊里吉原華やかな江戸時代、時刻の表しかたは十二支に分けて表すのが一般的であった。夜の都でも朝は卯の時<sup>とき</sup>、今の午前六時頃である。浅草寺の明け六つ、の鐘が聞こえる。傾城<sup>けいせい</sup>にのせかけられてカゴにまで乗りうつりたる朝がえり客 吉原に一夜あかしの朝がへり 猪牙<sup>ちよき</sup>のふとんも島がくれゆく 遊女の口車にのせられて、次はカゴカキにのせられて家路につく、船は山谷堀<sup>さんやぼり</sup>から猪牙船<sup>ちよきぶね</sup>という快速船でかえる。ほととぎす猪牙のふとんの朝じめりの句もある。明けの鐘ゴンとなる頃三日月形<sup>くし</sup>の櫛<sup>くし</sup>が落ちてる四丈半<sup>よじょうはん</sup>の都々逸<sup>どどいつ</sup>もすてがたい。二時間後<sup>たつ とき いつ とき</sup>、辰の時<sup>いつ とき</sup> (五つ時) 午前八時頃、居続けをきめこむ客もいる。雪の朝などは遊女も引き止める口突<sup>こうじつ</sup>に使う。吉原の雪の朝酒あたたためて又ひっかける居続けの夜着 2時間後、巳の時<sup>とき</sup> (四つ午前十時) 遊女達は風呂の後の朝飯である。早々と魚屋、八百屋がくる。所がら早うくるわの初纏<sup>はつがつお</sup>売人さへもはりのつよさよ 早うくるわは廓<sup>くわ</sup>にかけており、はりのつよさは意地を張るの張りで、高級遊女は、氣風のよさを値打<sup>ねうち</sup>としていた。遊里通いの理想は、京、島原の遊女に江戸吉原の張りを持たせ、長崎丸山の衣裳を着せ、大阪新町の揚屋<sup>あげや</sup>にて遊びたし、といわれた。高級遊女は揚屋まで

客に呼ばれて来るもので妓楼<sup>ぎろう</sup>で張り見世(格子から見ることのできる場所に座る格<sup>かく</sup>の遊女)には出なかつた。午の時<sup>うま とき</sup> (九つ正午) 髪を結び化粧をして、昼見世の始まるころ。かるく読書を楽しんだり、手紙を書いたり、訪ねて来た親と店先で話の出来るのもこの時間だった。わらい絵はよし原にしてくんなませ徒然草<sup>つれづれぐさ</sup>を貸本屋さん 格子先首を伸ばして待ちうけし親に話はながくなるらん わらい絵はポルノ本の類<sup>たぐい</sup>で頭文字のわを取ってわじり<sup>じり</sup>印ともいった。それなりの遊女は、どのような客の教養や趣味にも話を合わせるため、徒然草程度は必読の書だったらしい。未の時<sup>ひつじ とき</sup> (八つ午後二時) 見世は開いても夜の華やかさはない。客は参勤交代で主人の供をして江戸に来ている地方武士が目立つ。長屋住居で暮六<sup>くれむつ</sup>が門限(午後六時)のため、昼間しか出られなかったのである。つれづれなるままに長々とかく傾城<sup>けいせい</sup>の文 中身は、なつかしくゆかしくそして金と書き終わりにかしことはしをらしきかな 大小<sup>かんだい</sup>を貫抜<sup>かんぬき</sup>ざしの昼買は門に限りのありて来る客 貫抜<sup>かんぬき</sup>ざしとは、刀を水平にする差し方で地方出の武士のヤボくさい差しかた。おとし差<sup>おとしざ</sup>しが品の良さである。申の時<sup>さる とき</sup> (七つ午後四時) 昼見世の閉じるころであるが、本番の夜見世がひかえている。昼見世はすぎぬ夜見世はまだ早<sup>なか</sup>し中の町<sup>ちやう</sup>なる酒もりの客 子を売りし親の哀れはしぐれけり七つ頃なる里の夕暮 中の町とは町ではなく吉原の中心を縦断する大通で、この通りに面して左右に茶屋<sup>あげや</sup> (揚屋) がならんでいた。子

を売りしは禿かむろで七つ時に七歳をかけている。その年頃の女の子が禿として年季奉公に出た。期間は五年位でその間に素質が見込まれると、高級遊女への候補生として楼主が徹底した教育をするキャリアコースをたどる。極く少数のカムロもいた樋口一葉ひぐちいちようのたけくらべに出てくる美登利みどりは正にそれである。酉とりの時とき（六つ午後六時）くれ六つの鐘がなる夜見世よるの初りである。清搔すがかきと呼ばれる客寄せの三味線が、にぎやかに弾かれて景気を付け、雰囲気ふんぎを盛り上げる。暮れ六つの鐘にくるわの夜は明けてうかれ鳥がらすの騒さわぐ見世先みせさき 引ひっかけるともりと見れば恐ろしや夜見世よるに女郎ぢやうらうぐもの清搔すがか刻限こくげんの鳥とりはねぐらへかえる頃とばせて来たる三枚のカゴ 清搔は歌詞のない、客の心を浮き立たせる伴奏音楽である。三枚のカゴとは、普通カゴは二人でかつぐが交代要員が一人付くのを三枚肩といい、二人付くと四枚カゴ、四枚肩と呼んだ。スピードも上がるが金もかかる。戌いぬの時とき（五つ午後八時）過半数は地廻りぢまわや素見ひやしでも町内の賑わいは最高潮に達する。

三年もなじんだ客がおいらんの中の町にて待つ戌いぬの刻こく 三日みつかの恩おんを三年忘れないという犬に戌の刻を掛け、さらに初回しよかい・裏うら・三回目と三日通って、はじめて馴染客なじみきゃくとされることをふくませている。亥いの時とき（四つ午後十時）芸者をあげてのにぎやかなさわぎも、そろそろの頃合である。恰好をつけて箸に手も付けなかった遊女は何かの用事にかこつけて上階から下りて腹ごしらえをする。玉子たまご売りうり鮎あじ売うり声こゑのいろいろと交りの見世の夜食まかなう いろいろな行商にかけている交り見世とは中級どころの妓楼である。揚屋あげや（茶屋）を通さない客でもあがることが出来、それなりの遊女も交じっているところからその名がある。子この時とき（九つ零時）表向きは四つ（午後十時）が定めであったが、九つまで黙認されていたので、四つに大門くわりのとだけしめて潜戸ひそりどから出入させ、九つになって四（午後十時）の柏子木を打ち、その後すぐ九つ

（零時）の柏子木を打つのをしきたりとしたという。柏子木のうつ引きよ四つに五丁町今大門をしめて九つ 初会から打ちとけ語る子ねの時に喰くいつかれしぞ身の毒となる それなりの遊女は普通初回から客に馴れ馴れしくはしない、それが張りというものとはいへ、金づるになると思えば、計算づくで温かくもてなしてくれる。これがまるでネズミにかまれた毒はめつとなって破滅するかも知れない。子ねの時ときとネズミを掛けている。丑うしの時とき（八つ午前二時）草木も眠る丑満時うしみつぎというに語り明かすのも、それぞれの思惑からである。うそいうて客によだれをたらさず勤めもうしや丑満つの頃 丑の時と百人一首八四番ながらえば又此頃やしのばれん、うしと見しよぞ、のうしにかけている。寅とらの時とき（七つ午前四時）口うるさい家人が目覚める前にと早帰りする客も多かったらしい。家の首尾うち気づかう客は刻限のとらの尾踏おむ思おひなるらん 話わしいすことありんすと抱附だきついてはなしいせぬと止める後朝きぬぎぬ とらの尾と寅の時をかけている、アリン語は吉原独特のもので、遊女の出身地のなまりを消すための人造語であるが、この言葉によって他の遊里では味わえない、いかにも吉原らしい雰囲気ふんぎに浸れるのもであったらしい。後朝とは一夜を共にした男女の翌朝の別れを呼ぶ言葉である。

以上が吉原十二時（一日）である。終わりに大まがきといわれた大店だんだを述べる。吉原五丁町で江戸町と京町の二つに大籠おおまがき級の店があったといわれる。松葉屋かたえび、角海老なかがめ、中米、扇屋、品川しんがわ、三浦屋なかがうみ、中近江だいもんじ、大文字いなもと、稲本などがそれで、角町、伏見町、堺町などと格が下の店が続き、さらにその裏側の河岸には羅生門らしやうもん河岸と呼ぶ最下級の河岸見世が、お歯黒おはぐろドブの臭いといっしょに数多く並んでいたという。

五回にわたって江戸遊里史を、拙文も省みず綴りましたが、いくらかでも参考になれば甚幸と思う次第であります。